震災破損の本尊を修復

平安後期の造立と判明

群馬・豊山派常楽寺

群馬県太田市の真言宗豊山派常楽寺（本城亮俊住職）でこのほど、東日本大震災で破損した本尊・十一面観世音菩薩立像の修復が行われ、平安後期（12世紀）の尊像であることが判明した。2年に及ぶ復元修理が完了し、造立当時の金色に輝く尊容がよみがえった。

激しい揺れで内陣奥に安置されていた本尊が倒れ、高い台座から転落。部材が割れ、補修部分が剥離するなど著しく破損した。直後から仏像研究・修復の第一人者である仏教造形研究所（東京都）の本間紀男所長が、復元修理に着手。調査の結果、平安後期の一木造りで、江戸後期に大規模な修復が施されていたことがわかった。

さらに江戸期の修復で大きく変容した顔・胸・両腕両手等を、平安後期の様式で復元。江戸期にはすでに亡失していた光背も新たに取り付けられた。全身に金箔が押され、造立当時の輝きがよみがえったが、背面の一部には箔を押さず、平安の木地をそのまま残して「歴史の証言」とした。

太田市一帯は平安時代から鎌倉・南北朝時代まで源氏の名門・新田氏の本拠地とされ、同寺がある田島地区は新田源氏の田島氏が治めた地域。現在の同寺にほど近い「旧常楽寺跡」の周辺からは外堀をめぐらした武士の館跡が発掘されており、同寺本尊の造立に関わった有力者ではないかとも推測されている。

今回の修復を機に約900年前の地元の人々の篤い信仰心が明らかになったが、本城住職は「ご本尊が『もうそろそろ直してよ』と、私を頼ってくださったのかなと思っています」と述懐。「守り継がれてきたご尊像を大切にお伝えしていきたい」と話していた。

全国版の仏教新聞「仏教タイムス」四月十八日掲載

危険な状態の不動堂に

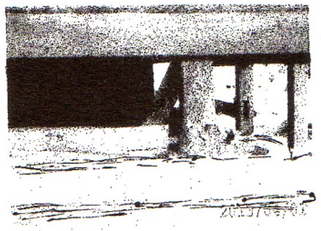
明治時代に、木崎地区（新田木崎町一六六四の一番地）にあった常楽寺、杉の内の蓮蔵寺、烏ヶ谷戸の円通寺の三ヶ寺が合併して、現在の地に寺が建立されましたが、最も歴史の古い木崎地区にあった常楽寺の寺名を引継ぎました。旧常楽寺の跡には「不動堂」が残り、円通寺跡には「薬師堂」が残っていますが、毎月二十二日は、「薬師堂」の縁日で、二十八日は「不動堂」の縁日にあたり、今日でも、それぞれ早朝六時に朝の勤行が行われています。住職も毎月二つのお堂の朝の勤行に参加し、地域の方々も、前日お堂の清掃をすませ、当番の方や寺役員さんが参加しての勤行です。

薬師堂は、平成五年三月にお堂を新築し、ご本尊の「お薬師様」をはじめ、三体の仏像をきれいに修復致しました。

常楽寺発祥の地にある不動堂は、これまでも地域の壇徒の皆さんの手で、何度と無く建物の修復や補修の工事を進めてきましたが、もはや修復工事では建物の維持は、不可能となってしまいました。

特に床を支える縁の下の柱など、腐食もひどく、周囲の回廊などは、乗るのも危険な状態です。屋根も、以前銅版葺工事をしましたが、建物本体の痛みもひどく、大変危険な状態です。

壇徒の皆さんには、いろいろご心配をお掛けしますが、現状をご賢察下さいまして、お力添えをお願いいたします。



不動堂の現状

常楽寺だより

平成25.4.29.